

# 高校生と家庭科

研究開発部  
下開 千春

公立高校における家庭科が男女必修となったのは1994年からである。1993年以前は、女子のみが必修とされてきた。家庭科には「家庭基礎」・「家庭総合」・「生活技術」の3種類があり、各高校で選択されている。具体的な内容としては、“人の一生と家族・福祉”、“家族の生活と健康”、“消費生活と環境”、“子どもの発達と保育・福祉”、“高齢者の生活と福祉”、“食生活の設計と調理”、“衣生活の設計と製作”、“住生活の設計とインテリアデザイン”などとなっている。

## < 高校生の食生活における家庭科 >

高校生にとって家庭科がどのように位置づけられているのか、食生活からみてみた。高校生の食べ物の情報入手の方法として最も回答が多かったのは、「テレビ」(54.3%)であった(図表1)。次いで「家庭科の授業」(16.8%)があり、「親」(14.6%)も情報源となっている。「テレビ」については、主にコマーシャルに流れる食べ物の新商品の情報を入手する媒体として、または料理番組やグルメ番組などを想定した回答であると思われる。一方、「家庭科の授業」という回答は、食べ物の栄養素や食材についての知識、実際の調理法を学ぶ場として回答が得られたものと思われる。

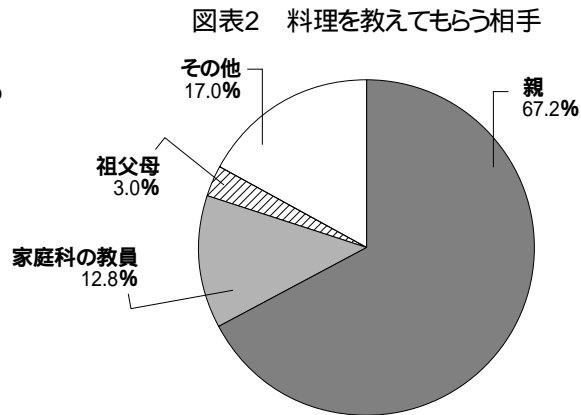
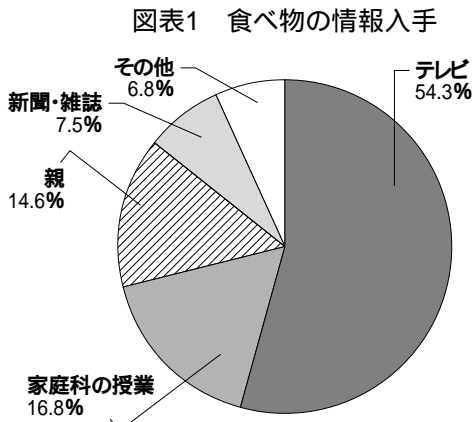
また、“料理は、だれから教えてもらうことが多

いですか？”との問いに対する回答をみると、「親」(67.2%)が圧倒的に多く、次いで「家庭科の教員」が12.8%と1割以上を占めている(図表2)。また、両親の帰宅が遅い家庭や休日は外食を主とする家庭など様々な家庭環境があることを考えても、家庭科の教員が果たす役割は小さくないといえよう。

## < 高校生が家庭科に求めるもの >

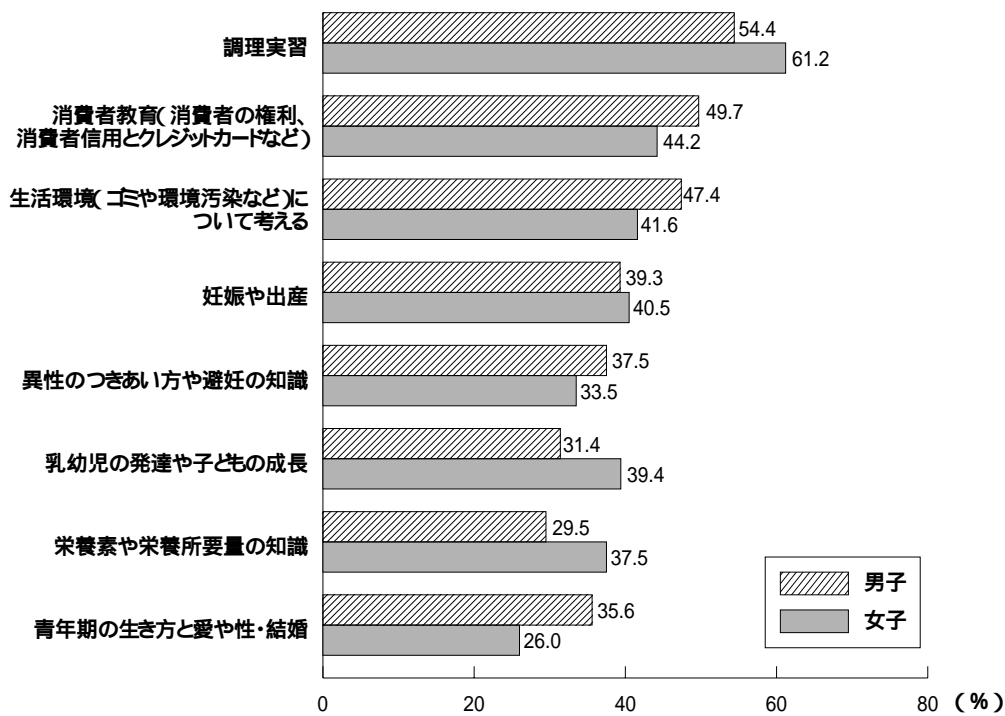
ここで、高校生が家庭科で必要と考える学習内容をみてみると、「調理実習」を「とても必要」と回答した割合は、男子が54.4%、女子が61.2%で最も多い(図表3)。次いで、「消費者教育」についても男子が49.7%、女子が44.2%となっており、多様な消費の方法が可能になった今日において高校生自ら消費者教育の重要性を認識しているといえる。1993年以前には、“なぜ女子のみが必修なのか”、“なぜ男子にも必要なのか”、という議論が繰り返されてきたが、男女必修となった後の男子生徒の意識をみる限り、そこには積極的に学ぶ意識がみられる。

現在、家庭科の現場では、以上のような高校生の意識に応えるためにも、調理実習が可能な学校施設の整備や、実社会を想定したリアリティのある消費者教育の実施が求められている。生きるための知識や技術を学ぶ家庭科は大学受験教科ではない。しかし、社会に出る前段階の学校生活において重要な役割を担うものであり、各高校における理解と取り組みが求められるのではないだろうか。



注:全国の高校67校、参加人数9,248名(男子37.4%、女子61.6%、不明1.0%)、2000年4月~7月実施  
資料:図表1、図表2共に財団法人消費者教育支援センター『食生活Q&A』(2001)

図表3 家庭科の学習の必要性(性別)



注:1998年2月、東京・埼玉の公立高校普通科、1・2・3年生618名(男子347名、女子271名)対象、質問紙法。数値は「とても必要」と回答した割合。  
資料:ベネッセ教育研究所、モノグラ・高校Vol.54『高校生の教科観』(1998)